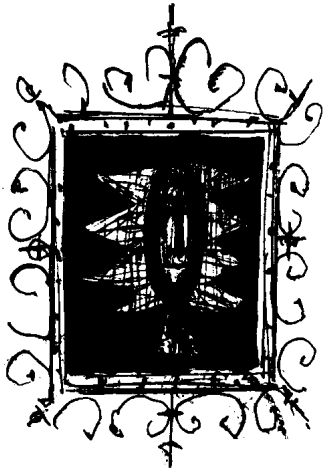
だれもが孤独

丹羽文雄

だれもが孤独

丹羽文雄



講談社版

だれもが孤独

昭和四十年五月二十五日発行

著者丹羽文雄

発行者野間省一

印刷所図書印刷株式会社

製本所株式会社大進堂

発行所株式会社講談社

東京都文京区音羽町三の一九

電話東京九四二局一一一一（大代表）

振替東京三九三〇

定価四三〇円

©1965 Fumio Niwa Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

だれもが孤独

装幀　荻太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

波の上

船がにぶい汽笛を鳴らすと、大島をはなれた。鉛色の雲がひくくたれて、海は黒ずんだ色をしていた。海はおだやかだが、小さい船のせいか、かなりゆれる。海の色は、晴れたときにかぎるのだ。灰色に黒ずんだ海は、何か象徴的でもある。しかも、不吉につながるものを連想させる。二時間ばかり経つと、船は最初の寄港地である利島についた。

細川孝司は甲板の手すりによりかかって、タラップを下りていく十五、六名の客をながめていた。一丁櫓のはしけが、ひとりひとりの客をのせる。はしけは大きくゆれている。あぶなっかしい移り方だが、慣れているとみえて、だれもさわがない、細川孝司は、無声映画のようにながめていた。気がついたときは自分ののっている船が動き出していた。孝司は靴音をたてて、甲板をあるいた。靴音までが、かれがよそものであることを吹聴しているようにひびく。淋しさが、孝司の心をおそった。が、淋しさは、あきらめの感情で十分に蔽われているはずであった。淋しさには、不安もまじっていた。その不安が徐々に淋しさにとって代ろうとしているようでもあった。それは、これから自分が未知の世界にはいっていくということから来る、平凡な不安だった。だれもが経験するだろう不安だったが、本人にしてみれば、まぎらしようのないものである。それをつとめて感じまいとした。孝司はことさらきつく靴音をたてた。子供が淋しさをまぎらそうとして、ひとりで力んでいるのに似ていた。

厚い雲の一ヵ所が切れると、そこから一条の陽光が海面に落ちた。よみがえるような衝動をあたえる、つよいかがやきであった。晴天の陽光には感じられない、何か慈悲のようなかがやきであった。孝司は陽光に対して、これほど鮮烈な印象をうけたことがなかった。単調な海の上では、空の変化が何ものよりも強烈にうけとれるせいかも知れなかった。

船はいつの間にか、島をまわっていた。左前方に円錐形の島がみえる。その島の向うに、らくだのこぶのような二つの山をもった島の一角があらわれた。その島が、これから細川孝司が赴任しようというF島である。孝司は手すりによりかかり、これから自分と密接な関係をもつ島の全貌をよくみておこうと思った。船はゆっくり南下した。F島は平地を感じさせず、海の中にぽつんと置かれた山のようであった。

雲が次第に晴れてきた。南国の太陽が、島の西側をあかるく照らしはじめた。断崖、砂浜、また断崖、砂浜と、めまぐるしいほどの海岸線であることがわかった。断崖も白かった。砂浜の白さは、染まりつくような色彩感である。一時間あまり、孝司はF島と向きあっていた。孝司は、くらい気持をわすれた。やがて、沖合で、船がとまった。

——あれが、K港？

港というにはあまりに貧弱な港であった。港にふさわしい施設はみあたらない。そこへ船をつけるのが比較的安全というので、港のように使われているというにすぎない風であった。波をけりたててはしけが近付いた。孝司の憂鬱が、もどった。トランクとスーツケースをさげて、孝司はタラップを下りた。はしけには、迎えらしいひとがのっていなかった。今日この船でつくことは、連絡してあった。はしけにゆられる孝司は、ことばも通じない他国に上陸するように心細かった。はしけは乱暴なくらいに孝司の心細さをゆさぶり、やがて砂浜に近付いた。

「細川君はいませんか。東京の細川君」

半袖のシャツに、もめんのズボンをはいた若い男がはしけに向ってどなった。

「ぼくだよ」

孝司はスーツケースをもったままの右手をあげた。はしけの動揺がさらに大きくなった。孝司は若森との初対面を、たがいに上下にはげしくゆれる空間ですませることになった。

「やあ、いらっしゃい、若森です」

孝司より三つ四つ年上の、がっちりした体軀の若森だった。

「どうでした、海は？」

「静かだったので、楽でした」

「それは運がよかった。何しろこんなところだから、すこしあれると、定期船も二週間に一度ということもめずらしくないんですよ」と、孝司の手からトランクをひきとると、「まず、下宿へ案内しましょう」

島の人口は、三五〇〇と孝司はきいていた。

「ここは、島の唯ひとつの村ですよ」

孝司が東京で想像してきたよりは、明るくて、活気がありそうだった。孝司の目は、民家の石造りの家屋に興味をもった。ほとんどの家が、がんじょうな石で建てられていた。風格があった。おどろいたことには、家の片隅の豚小舎まで石造りである。若森は、すれちがう島のひととあいさつを交した。島のひとは立ちどまって、若森のつれの孝司をながめた。その眼差は、知らない人間を迎える冷たさを感じさせなかった。遠来の客をむかえるといった、あたたかなものがあった。その中には、多分に好奇心もまじっている。

「細川君」

「はい」

「くさくないですか」
若森が笑っている。孝司はさきほどから気がついていた。異様な臭気にまいっていたところである。
「豚小舎ですか」
あちらこちらにみられる豚小舎の臭気のようであった。
「クサヤです。いまが生産期なので、当分はこの臭気になやまされますよ」
「クサヤ？」
孝司には、ぴんと来ない。
「ほし魚のクサヤですよ」
「ああ、あのクサヤですか」
小さいときから偏食の孝司は、これまで一度もクサヤをたべたことがなかった。大きくなってから偏食はいくらかなおっているとはいえ、クサヤには手が出なかった。
「ここにきた当座は、ぼくもこの匂いには閉口したものです。しかし、クサヤは大の好物なんで、文句はいえませんがね。君は好きですか」
孝司は、頭をふった。とんでもないといった大げさな表情だった。
「はっはは、一度ためしにたべてごらんなさい。くさければ、鼻をつまんで、口の中にほうりこめばいい。いったんクサヤの味を知ってしまうと、わすれることができなくなりますよ。酒によし、飯によしです。干物の中では、断然王者です。東京あたりで本場のクサヤとなると、びっくりするほど高価ですからね」
若森は、ふとっ腹な笑い方をした。からだこそ大きいが、年齢の若さを笑いのゼスチャでおぎなっているような感じであった。仕事の上では先任者であり、この島の体験者であることの権威を孝司にみとめさせようとするようだった。孝司は、先任者に悪意は感じなかった。が、好きになれそうなタイプではないと、初対面の瞬間にそう思った。
二タ棟からなる、かなり大きな石造りの家の前に立つと、
「ここですよ」
「ここが下宿屋ですか」
「いや、下宿させてもらうのです。ここには、べっぴんのモンモさんがいますよ」
「モンモ？」
「島では娘のことをそう呼ぶんです」
島では、娘が七、八歳になると、留守勝ちの両親に代って、幼児の守りをしなければならなかった。「もんをする」「もんもする」ことからおこった呼名だった。美しい娘がいるときかされて、孝司はあわい期待をもった。
高屋といい、この島では中位に属する家庭のようであった。若森は孝司をつれて、玄関にはいった。

細川孝司は一年の任期で、F島区検へ東京から転勤してきた。転勤というよりは、長期出張といった方がふさわしい。F島区の先任者のひとりが肺浸潤で倒れたので、その

後任として細川孝司が任命された。任命されたといえば、きこえはよいが、一時期とはいえ、島流し同然の異動であった。が、孝司はこの転勤を内心よろこんだ。それは、一年間東京の兄の家庭からはなれることができるからである。兄の家庭では、居候とおなじだった。兄の弥彦とは、母親ちがいであり、しかも年齢も親子ほどにはなれていることに原因する。孝司の母親は後妻だったが、すでに亡くなっている。父親も亡くなり、兄の弥彦が孝司をひきとった。兄はともかく、孝司には嫂にあたる富士子が苦手である。富士子から一年間のがれることができるなら、F島行もそれほど苦労ではない。

F島区検は役所といっても名ばかりで、人員もすくなかった。二、三の専門家をのぞけば、あとは島の人間である。病気をした先任者が、すべての事務をうけもっていた。多少法律的な事務があつかえるものがほかにいなかった。検察事務官はいるが、雑用的な事務まではやらない。先任者は一年間療養をすれば、また島にもどれる見こみがあった。細川孝司は、東京都下、T区検の下級吏員である。高校卒の学歴だけで、法律的な知識はなかったが、T区検に三年勤務しているあいだに、区検の事務がさばけるようになった。

「一年間だが、F島へ行ってくれないか。しかし決して強制はしないよ」

と上司がいった。が、下級官吏にとって上司のことばは、命令と同様だった。細川孝司は、二十一歳になっている。孝司も、大学にすすみたかった。が、兄の家で居候あつかいをされているのでは、ぜいたくもいえなかった。兄には、弟を大学にやってもよい意志はあったのだが、妻の富士子の反対で、駄目になった。孝司は、はやく一人立ちがしたかった。高校の友達の父親が、T区検の収入係を永年つとめていて、そのひとにすすめられて、T区検にはいった。将来のことを十分考えた上というのではなかった。孝司は学校時代から英語だけは熱心だった。とくに英会話をマスターするため、外人の家に通った。

一ヵ月が経った。

赴任前に考えていた淋しさも不安も、孝司は落したようにわすれた。若さのつよさだったかも知れない。若さの順応性ということもできそうである。むろんそれには、高屋家の遠来の客に対する思いやりが大きく影響した。

高屋家は、七人の家族だった。主人夫妻に、男の子ひとり、娘ふたり、それに主人の両親が健在であった。主人の高屋は五十歳前後、たくましいからだをしている。細君は、品のあるひとだった。若森のいう美しいモンモとは、次女の晴江のことであった。長女の延江は、平凡な、目立たない娘だが、晴江は両親のよいところだけをうけついでいるようであった。長男の一郎は父親似の、中学生だった。のびのびと育っていて、背丈はほとんど孝司とおなじくらいである。孝司は、隠居の老夫婦がすきだった。

F島の事情も一応わかった。暗い電灯のもとで、細々と非文化的な生活をおくっているものと考えていたのは、軽卒だった。高屋には、新しい型のテレビが備えられていた。電気洗濯機、電気釜など、都会生活者とおなじである。

「老人の多い島ですね」

夕食がすむと、高屋は話相手に孝司をはなさなかった。親子ほどにも年齢がちがっているのだが、

「七十歳、八十歳はざらですよ。しかも、目に一字も解しないという人間のいないのが、この島の自慢です」

この島では、もっとも貧しい漁師の老人にしても、文盲というものはほとんどいなかった。

「昔、といっても、明治の初めまでは、このF島は流刑の地だったからです。流罪人の中で、無宿者は別として、武士のほとんどは手習師匠となって、寺小屋式教育が行われた。島の人間は、だれもが勉学することができたのです」

「一生この島ですごした流罪人も多かったのでしょうね」

「島の人間には、そうした武士の血がながれているんですよ」

そういう話を、これまで孝司も何かで読んだことがある。が、辺鄙な島にくらしながら、気品をそなえた、この家の主婦の容貌などを現実にながめると、歴史が生きているのがわかる。それは、しみじみとした感動だった。

毎夜のように、高屋は孝司を話相手にした。高屋は孝司を下宿させたことを、よろこんでいる。酒をのんで、語るのである。おとなしい孝司は、高屋の話相手にはうってつけのようであった。孝司はどんな話も、感心をしてきいた。それは、お義理だけではなかった。しかし、連日となると、孝司もときには話相手がつらくなる。自分の部屋へひきあげたくなる。が、それをさせないものがあった。晴江の存在を、すぐそばに感じるからである。

「お父さんたら、自分の知っているかぎりの知識を細川さんにふきこもうとしてるみたいね」

と、晴江が口を入れる。

「どんな話にも興味がある。学校のころ歴史には何の興味もなかったんだけど、ここにくると、歴史が生きてるでしょう。もう一度歴史の本がよみたくなったくらいだ」

孝司はお上手をいっているのではなかった。が、できることなら晴江がもっと話の中にはいってきてくれることを希望する。とりたてて美貌とはいえないのだが、晴江は派手な顔立だった。みごとに発育した肢体と、白い肌が印象的である。これまでこれといった女性と交際のなかった孝司には、晴江はまぶしいほどの存在である。

「多田さんの後任というので、もっと年齢をとった方とばかり思ってたわ」

「こんな若僧に満足に仕事ができるかと、あやぶんでいるんでしょう？」

「いいえ、感心してるわ」

白い肌の声というようなものであった。透明で、ひびき

がよくて、あたたかいのだ。そばにすわっている晴江を感じるその感じ方が、自分でも異様に思われるほどであった。

モンモ

――島の生活に、ようやく慣れた。報告したいことが、いろいろとある。ぼくの手紙を君がまとめて保存しておいてくれたならば、F島現地調査報告書が立派に出来上るだろう。まず海のことからいおう。島をとりまく広大無限な海には、天国と地獄の差がはっきりとしている。おだやかな晴天の海は、まさに天国である。海はあくまで青く、砂は白く、どのような形の雲にも興味がもてる。ほこりにまみれない自然のすがたがこれほどきれいなものだとは、島にくるまで知らなかった。この島の人情ゆたかなのも、歴史のせいだけではない。自然にめぐまれているからだ。しかし、いったん空が曇り、海があれはじめると、凄惨な地獄と一変する。海は兇暴な本性をむきだしにする。島は孤立し、みじめな存在となる……

細川孝司は四つ年下の甥の細川伸に手紙を書いた。叔父甥の関係だが、知らないひとは兄弟とみた。顔も似てい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。F島に赴任してから、東京を思うとき、孝司は伸の顔を思いだす。伸が東京を代表していた。世話になっている下落合の兄の家庭を、伸が代表していた。伸は、一人子だった。叔父甥の感情からでなく、ふたりは兄弟のように仲がよかった。

「伸ちゃん」

「孝ちゃん」

しかし、嫂の前では、孝司は遠慮した。伸は、そんな孝司をかばってくれた。孝司は伸に手紙を書くことを約束した。手紙を書くことは、たのしかった。手紙は、島にきてからつけてある克明な日記のかきうつしでもあった。

二ヵ月が経った。

孝司は、F島に来てよかったとしみじみ思うようになった。単調な役所の仕事も、苦にならない。毎日々々がたのしい。

――この島で、ただひとつ不愉快に感じられるのは、ぼくを港に迎えにきてくれた若森という同僚のことだ。かれに対するぼくの最初の印象が的中していたことになる。二ヵ月が経った現在、ぼくははっきりと若森に嫌悪の情をいだくようになった……。

孝司は何回目かの伸への手紙の中に、そんなことを書いた。

若森は孝司とおなじ東京の人間だった。学歴もおなじである。F島のような僻地にまわされて、すでに三年が経っている。それだけでも若森が有能な人間でないことが、あきらかであった。孝司は、島のひとに対する若森の横柄な態度がいやだった。検察庁という背景を利用して、若森はおたかくとまっている。ことばにも、態度にも、若森は優越感をしめそうとする。孝司には、むしずのはしる思いである。が、島のひとは、あたたかだった。孝司の方で、いらいらするくらいに島のひとはあたたかく若森に接する。それは、若森の島流し同然な境遇に対する反撥だったのかも知れない。そうふるまうことで、わずかにおのれを支えているのかも知れなかった。島びとのやさしさには、流罪人をあたたかくあつかった昔の温情が、現在もなおのこっている風である。

ある休日だった。昼食どきに、めずらしく主人の高屋の顔がなかった。

「ご主人は？」と、孝司がきいた。

「組合の会合があるので、朝から出かけてます」と、細君が答えた。

「お父さん、おっちょこちょいだわ。たのまれると、どんなことでも引きうけて、あとで困ってるわ」

晴江のことばを、姉の延江がひきとって、

「そのくせ、いそがしい、いそがしいってこぼしてばかりいるわ」

「高屋さんは何となくひとから信頼されるんですよ。そういう人徳のある方ですよ」

と、孝司はお世辞でなかった。
「お父さんも、まんざらでもなさそうね」
細君が娘たちをみて、微笑した。
「でも、細川さん、ご迷惑じゃない？」
「何ですか」
と、孝司は晴江をみた。
「毎晩おなじような話ばかりきかされて……？」
「とんでもない。おかげでF島のことがよくわかった。感謝してるんですよ」
「そうかしら」晴江はことばどおりにはうけとっていない。「うちの先祖は、平家なんです。そんな自慢話ばかりですもの、いくら辛抱のいい細川さんだって……」
「たしかにこの島には、平家の残党が漂着したらしいですね。以前、何かでそんなことをよんだような気がする。気のせいか、お父さんの顔には平家末裔の名残りがみられますよ」
「うわあッ、そんなことときいたらお父さん、ますます自信をつけるわ」
からだぐるみでしゃべる晴江のゼスチャが、孝司には気持がよい。さわやかな風のようである。若くて、白い匂いが、ながれてくるようである。
「晴江、せっかくのお休みだから、細川さんをどこかへご案内したら？」と、母親がいった。
「そうね、細川さん、まだ知らないところがたくさんあるでしょ？」
「どこへでもつれてって下さい」
孝司はさきほどから気になっていたのだが、食事に隠居があらわれないことである。しかし、高屋家に世話になるようになってから、孝司は七人の家族といっしょに食事をとったことがなかった。隠居所で食事をしているのには、何か家庭的な理由があるものと思った。それを訊く折がなかった。
「この島では、隠居と母家とはべつべつに食事をとる習慣です」と、細君が説明をした。「どこの家でも、母家と隠居とわかれてます。経済的にはひとつですが、食事は別です」
「ちょっと変った島の生活様式ですね。そういう習慣になったのには、それだけの理由があるからでしょうね」
島の敬老思想は、孝司の印象につよいものだった。めずらしいものがはいると、何をおいても家族はまず隠居所にとどける。
孝司は部屋にもどり、ベージュ色の細いズボンにうすいグリーンのシャツをきた。派手すぎるので、いままで一度もきたことがなかったのだが、東京なら、孝司のような年齢のものはだれもが着ているのだ。区検という堅苦しいところにつとめていても、勤めから解放されれば、年齢にふさわしい感覚もほしい。晴江と外出するには、ふさわしかった。
「出かけましょ？」

と、呼びにきた晴江が、孝司の風に目をとめた。がすぐ、共感するものが晴江の眸をかすめた。晴江は白の袖なしのブラウスに、コバルト色の膝までのズボンだった。ぴったりと肌についた薄手のズボンだ、肉体の線をえぐったようにあらわしている。くびれた胴から腰にながれる線が、ゆたかで、みごとだった。

途中でゆきあう島びとは、屈托のないあいさつを交した。だれも興味的にはながめていない。島びとは足音をさせない。砂質の路面は雨がふってもぬかることがないので、みんなぞうりをはいている。

「F島ってこんなにいいところだとは知らなかった。いつまでも倦きないだろう」

「そうかしら」

「石造りの家なんて、東京ではみられない」

「ここは抗火石の産地よ。採掘の三分の一は、F島内の建築につかわれるわ。ぜいたくでなくて、石の方が安いから使っているのよ。それにしょっ中、台風に脅やかされるでしょう」どこの家も桝形の土手にかこわれている。道が屋根よりも高くなっている。

「清潔な感じが好きだ」

ふたりは、いつか墓地にきていた。

「この墓地もそうだ。墓地というと、妙にしめっぽいのがあたりまえだけど、ここは亡者が出てくるには明るすぎるようだ」

「島のひとは、とても祖先を大切にするわ。だからお墓をいつもきれいにしておくの」

晴江が先に立った。苔むした墓があった。

「流人墓よ」

雑草は茂っているが、それでもどこか明るい。

「あれは何かしら。やはり墓かしら。妙な形をしてるが」

「あれは、酒樽よ。とっくり形の墓もあるわ。故人はよほど酒がすきだったんでしょうね」

よくみると、たしかに酒樽の形にきざまれている。とっくりの形をしたのもあった。

「あそこに、もっと変ったのがあるわ」と、晴江が軽く孝司の肘に手をかけた。

「何かしら、これは？」

「サイコロとツボよ」

「すると、賭博の……？」

「そう」

「愉快だな」

墓地のもつ陰気さは、かけらもなかった。何となく、愛嬌があった。風通しのよい、明るい自然の中では、墓地の概念が成立しにくいのだろう。形式的な一定の墓の形におさまって、そのことに何のうたがいも持たないですましていることが、不思議に思われる。

「細川さんなら、どんな形かしら」

「さあ、とっくりも苦手だし、サイコロときたら、まった

く縁がないし……」
「品行方正ね」
「そういうわけでもないが、残念ながら今日まで適当なチャンスがなかった」
「それじゃ何の形を希望？」
「ぼくが好きなものといえば、野球ぐらいだから、ミットか、グローブの形かな」
伸を相手に孝司は、キャッチボールをする。人通りのすくない、うちの前であった。が、孝司はキャッチボールに熱中するわけにいかなかった。ボールをほうりながらも、嫂の目を感じた。あそんでいるひまがあるなら、家の中の用事をしてほしいというのが嫂のきまり文句である。伸の相手となってボールのなげっこをする孝司を、嫂はすなおにみとめることができないらしい。孝司は、嫂の声を思い出した。
「若森さんならね」と、晴江が歩きながら孝司をふりかえった。「あのひとなら、とっくり形だわ」
「かれは、のんべえだから」
晴江が若森をひきだしたのが、孝司はいやだった。
「若森さんも三年前まで、私のうちにいたのよ」
そんなことをいまごろになってきく孝司は、何故かと思った。若森も話さなかった。高屋の家族もふれなかった。話すほどのことではなかったのかも知れない。
「一年半ぐらいいたかしら」
孝司はだまっていた。
「毎晩お父さんとのんでいたわ」そういってから晴江がからだをくねらすようにした。くすっという笑いは、そのからだの動きからもれたようである。
「さあ、もっとほかへいきましょう」
若森が一年半晴江の家に下宿していたことに、孝司はこだわった。肩をならべて墓地を出たが、晴江の笑いが次第に意味深長になった。

——何故若森が高屋を出たのか。
役所の仕事は、だれでもできるような事務だった。経験者でなくともすむのである。あつかう事件がすくないので、楽だった。孝司は、若森の勤務ぶりが気になった。勤勉ではなく、その怠惰ぶりである。若森は要領よく怠ける。孝司としても、忠実を看板にしているわけではないのだが、若森をみていると、はらがたつ。
「細川、たばこないか」
あくびばかりをしていた若森が、孝司のデスクにやってきた。毎日のように若森が孝司のたばこに手をつけているので、孝司はきこえないふりをした。若森は孝司のデスクに腰をかけると、そこにおいてある孝司のたばこから一本ひきぬいた。
「マッチはないか」
孝司は無言で、左手でポケットからライターをとり出し

た。
「どうだい、うん？」
と、若森が横柄な口をきいた。
「どうだって、何が？」
ペンを置くと、孝司はゆっくり顔をあげた。
「下宿だよ」
「下宿？」
孝司の表情はとぼけたが、内心は緊張した。
「いい家だろう？」
「ああ、そうだね」
「とくに晴江という娘が、いいだろう？」
孝司はたばこをくわえた。
「口説いてみたか」
孝司は若森の目をみた。
「島の娘は情がふかいというからな」
若森は、にやりと笑った。何かを知っている笑い方であった。
「それでいて、あっさりした娘だよ。もっとも晴江にかぎらないがね。あっさりしてるのは、この島の娘の特徴だから」
「あっさり？　どういう意味か」
「いまにわかるさ」
「高屋の家族は、みんないいひとだ。君は一年半もあそこに下宿していたんだね」
「晴江がそういってたのか」
「あんな親切な、いい家を、どうして出たのか」
「個人的な事情だよ」
「君は最初それをぼくに話してくれなかった。何故だ」
「そんなこと、べつにかくしておくようなことじゃないさ。せまい島の中のことだ。ぼくが話さなくたって、いつか君の耳にはいる。高屋の連中がとうに君に話したと思ってたよ」
「晴江さんにはじめて教えられた」
「晴江の口からね」
そのいい方が、すなおでなかった。呼びすてにするのも、孝司にはきき苦しかった。何かにつけて横柄な若森だが、この場合はききすてにならない。
「あの娘をつれて、三人で温泉へいこうよ」
孝司は答えなかった。
「こんな島にも温泉があるんだ」
「ああ、その内にね」
孝司は、席を立った。
「もう一本くれ」
と、若森がいった。部屋を出ると、孝司はくわえていたたばこをすてて、靴でふみにじった。

島の温泉

「この島には、温泉があるんですってね」
夕食のとき、孝司が高屋に話しかけた。
「細川さんは知らなかったのですか」
「今日、役所でききました」
「島の西南になるかな、海にのぞんでいて、松林もあり、なかなかいいところですよ」
「お湯も熱いし、とても景色がいいから、是非いってごらんなさい。晴江、細川さんを今度ご案内したら」
と、細君が口を出した。
「おねがいします」
と、孝司は晴江をみた。若森もこの家に下宿していたあいだには、こんな誘いをうけたのではないか。孝司は、この家における若森のことが知りたかった。もちろん、よいことは考えられない。自分にとって都合の悪いことである。怠惰で、横柄で、野卑な態度の若森がこの家にのこしていったものが、きれいな、まともなものとは思えない。
「将来この島が観光地になったら、あすこなんか大したものになる。金があれば、温泉旅館でも建てるんだが。きっともうかる」
高屋は残念がる。
「またお父さんの口癖がはじまった。お父さんの考えつくようなことなら、だれだって考えるわ。まあ、豚でも飼ってる方が無難ね」と、晴江は遠慮がない。
「こいつめ」
「悪い案じゃないですね。ぼくにも金があったら、そんな事業に投資したい」
孝司は、とりなすようにいった。
「もうすこし交通の便がいいとね。すこし海があれると、すぐ欠航では、観光とまではいかんですよ」
「しかし養豚も立派な仕事ですね。ぼくはここにくるまで、こんなに養豚がさかんだとは想像もしてなかった」
「F島の豚といえば、東京の市場でも定評がありますからね」
「立派な石造りの豚小舎には、びっくりした。東京じゃ、いまもって、もっとひどい小舎に人間がすんでます」
おもねるつもりはないのだが、結果はそういう風になる。晴江を意識するせいだった。
「今度の日曜日にする？」
と、晴江が温泉行をきいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com